自然の権利の拡大にみる人間中心社会から環境共生社会への転換の可能性に関する調査・研究

【目次】

序章
第１章　環境問題の背景にあるもの
　第１節　環境問題はいつからあるのか
　第２節　経済学における人間社会と自然との関係（～初期古典経済学）
　第３節　経済学における人間社会と自然との関係（古典経済学）
　第４節　小括
第２章　「自然の権利」と環境問題
　第１節　自然権の登場と人間中心主義
　第２節　伝統的西欧における人間中心主義の脱却と自然の権利
　第３節　自然の権利の必要性
　第４節　小括
第３章　環境倫理学と環境哲学
　第１節　環境倫理と環境哲学
　第２節　環境倫理は必要か
第４章　アメリカのおける自然の権利の展開
　第１節　クリストファー･D･ストーン論文
　第２節　シエラクラブ対モートンの判決
　第３節　小括
第５章　日本における自然の権利訴訟の展開
　第１節　日本初の「自然の権利」訴訟と日光太郎杉事件
　第２節　日本の主な「自然の権利」訴訟
　第３節　小括
第６章　長崎県諫早湾ムツゴロウ訴訟
　第１節　諫早湾干拓および有明海について
　第２節　ムツゴロウ訴訟について
　第３節　アンケート調査
終章
図表一覧
参考文献･参考資料･参考ＵＲＬ一覧
謝辞

【目的】
　大量のムツゴロウが死滅した、長崎県諫早湾における干拓事業と、その差し止めを求めたムツゴロウ訴訟が提訴されたのが 1996 年のことである。この訴訟は“「自然の権利」訴訟 ”といわれるものであり、ムツゴロウという自然物を原告にしたものである。自然物を原告にすることは、「自然の権利」の拡大である。本論文ではこの「自然の権利」に注目し、その拡大の歴史と現状を把握することで、環境と共生する社会への可能性を、環境倫理学および経済学的視点から考察した。
【方法】
　第１に、環境問題の歴史を整理するのと同時に、経済学において自然がどう捉えられてきたか文献を用いて調べた。第２に、「自然の権利」の発達･拡大の轢死を整理した。第３に、「自然の権利」訴訟で先進的なアメリカの事例や、学説を調べた。最後に、日本における「自然の権利」の展開についての整理と、ムツゴロウ訴訟についてのアンケートを行った。
【結論】
　まず、アメリカにおける「自然の権利」は、理論的および実践的に拡大されていることがわかった。自然物が法廷に立つことが認められ、自然に対しての理解が法律的にもある。しかしながら日本の場合には、まだ「自然の権利」が市民権を得ていないといえよう。法廷に立つことはまだ認められておらず、それを後押しするような理論の展開も目立たない。いまだ「自然の権利」訴訟が認められていないことからも、日本における「自然の権利」はまだまだ充分に認識されていないことがわかった。
【参考文献】
ロデリック･Ｆ･ナッシュ　松野弘訳　『自然の権利』　筑摩書房　1999 年
ハンス･イムラー　栗山純訳　『経済学は自然をどうとらえてきたか』　農文協　1993 年
尾関周二編　『環境哲学の探究』　大月書店　1996 年